

# 戦中派の遺言（結）

大賀 龍吉 陸士56

今年（明治維新150年）である。テレビでは「西郷どん」が放映され、記事も増えている。

黒船によって目を覚まされた島国日本が如何にして覚醒し、構造改革をなし遂げて独立を確保し、独自の繁栄を果すことが出来たか。

この一カ月は、明治の先覚の跡を偲び、特に西郷南洲公の遺訓と言行に浸ってきた。佐藤一斎『言志四録』、西郷南洲遺訓（手抄言志録及び遺文）等である。

思い起こせば、広幼時代は教頭先生の影響で、楠公に傾倒していたが、陸士予科に入って湯田光臣区隊長（49期）の感化で南洲翁に惹かれ、爾来、書物も読み、話も聞き、日常的にも大きな感化を受けた。

区隊長殿は、所謂支那軍冬季攻勢の際に、「石城湾」の守備に当られたが、一箇中隊の守備隊に対し一箇師の攻撃を受け、完璧な防衛戦闘で師団長を撃退し、甚大な被害を与えて撃退された。

この功績により個人感状を受けられ

たが、特筆すべきは、部落の住民の老病・婦女子を平生勞り又撫育されていたので、防衛戦闘に当り住民が自発的に鍋・釜を被り守備陣地に食料・弾薬を運搬したことである。これは戦陣訓の「皇軍」の項に、皇軍の例として記載されたのである。区隊長は薩摩隼人の典型的人物であり、大西郷を心酔しておられた。

御着任後の最初の区隊会の時、区隊長が左の南洲翁の「偶成」詩を朗々と吟ぜられたのに感動して以来、小拙も、大南洲に傾倒するようになった。

## 「偶成」 西郷南洲

一貫唯唯諾 從來鉄石肝  
貧居生傑士 勲業頭多難  
耐雪梅花麗 経霜楓葉丹  
如能識天意 豈敢自謀安

南洲翁の心境、敬天愛人の志がよくわかる。

石平氏は、日本は今、神武建国以来の危機であると言い、ペマ・ギャルポ氏は「日本人よ、中国の属国になつてもよいのか」を出版し、あまりにも危機意識のない日本の政治家・国民に対し警鐘を乱打している。

馬淵元駐ウクライナ大使曰く、「日米同盟によって日本の防衛は一応何とかなるかも知れないが、国内外の反日

勢力の謀略による自壊が最も危険である」と。危機意識の最も必要な政治家の質の低下は目を敵うばかりだ。

「先憂後樂」こそ、エリートの本質ではないか。

西欧では「ノーブレス・オブリージ」と言い、名譽ある地位には相当する高貴なる責任があるということだ。

藤原正彦教授曰く、「エリートたるリーダーの資格は『教養、覚悟』の二つである」と。

『南洲遺訓』より引いてみよう。

一、命もいらず、名もいらず、官位も金もいらぬ人は始末に困るものなり。この始末に困る人ならでは、艱難を共にして国家の大業は成し得られぬなり

二、正道を踏み、国を以つて斃るる精神なくば、外国交際は全かるべからず。彼の強大に畏縮し円滑を主として曲げて彼の意に順従する時は、輕蔑を招き、好親却つて破れ、終に彼の制を受けくるに到らむ

かかる透徹した教養と覚悟は、如何にして養なわれるのであろうか。

一つに幼少時の躰と青少年時代の文武両道の鍛練である。更に覚悟（死生観）である。

元寇の北条時宗公以下の武人、幕末の志士にはこれがあつた。南洲翁も少

年時よりの郷中教育、更に農村担当としての実務と教養、特に人間として根本をなす死生観は無参利尚への参禅があつた。又、『言志四録』他、陽明学への研鑽がある。

元寇の時の北条時宗公の研鑽と果斷は蘭溪道隆禪師、仏光国師への参禅に依るところが大だ。

「事に臨んでは危険を顧みず、身を以つて責務の完遂に努め、以つて国民の負託に応える」と宣誓して自衛官となつて自衛隊員を文民統制の下に、非常の際に政治家が決断し処置出来るであらうか。現在の政治家を視ると甚だ心もとなない。

仏国のマクロン大統領が2月に入つて、「徴兵制を復活させる」と宣言し、その準備に着手した。これは、大統領選の公約でもあつた。18、21歳の男女に一月間軍務を経験させ、毎年60万人の参加者を見込み、危機の際に国事補佐する予備役を確保し、軍や関連産業の人材を確保する狙いがあるとされる。佐藤元空将は『正論』4月号において、「国を守るのは苦役なのか」と題し、的確にこの問題を整理し、せめてスイス並みに成人式前後に身体検査を義務付け、フランスのように一月程訓練を義務付けすることを提案している。

『徴兵制が日本を救う』は楠谷勲夫

氏（陸自62）の著書だが、ペマ・ギヤルボ氏ではないが、真に「侵略に気付いていない日本人」、特に政治家に見られる質の劣化こそ日本の危機ではないだろうか。

### 「兵役は国民教育の場である」

ある調査によれば、「国家の危機に当り、一国民として国を守るために戦うか」との設問に、多くの国で70%以上、中には90%の者が賛成したのに対し、我が国は18%であったと聞き、暗然たる思いだ。但し、救いは、中年層より若年層の方が率が高かったということだ。敗戦後遺症に汚染されている層と、汚染の少ない若年層という見方も出来る。故渡部昇一教授の言われた「敗戦後遺症」の抜けない層と汚染の少ない層、或いは「マスコミ」の影響の大きい層と然らざる層ということも出来る。

日本人の本性は素晴らしい。戦後70年は徳川時代260年に相当するのだ。幕末期以上の国家存亡の危局を乗切るためには敗戦構造を打破し、名誉ある独立国日本の構造改革により打破できることを信じて、この稿を終りとする。